

ロンドン、ウェスト・エンド 時代のG・V・ローシー

日下 四郎

まず今日まで全く不明とされているローシー（Giovanni Vittorio Rossi）^{*1}の生没年についてであるが、大正七年（1918）に書かれた松居松翁の一文『日本歌劇の犠牲者』^{*2}の中に、以下のような一節がある。「君、僕は十六才の時に東洋へ来たことがあるのだ。僕は当時四十三人から成るコミック・オペラの座員の一人で、ジャバの立派なオペラ座で興行した。それからスマトラ、シンガポール、彼南、バンコック、コロンボと巡業してイタリアへ帰った。爾来ここに三十有七年、東洋の盟主たる日本の首都でコミック・オペラが時機尚早の誤り……云々」。これはローシーが六年間にわたる日本での芸術活動^{*3}に敗れ、アメリカに再起の地を求めて横浜から出航する時、見送りに来たただひとりの日本人松居松翁にもらした述懐の一部である。ところがここにメモされた数字（・・・の部分）をもとに、この日から年月をさかのぼって行くと、彼の生れは大体1965年であることが算出出来る。とすればこの非運な芸術家が来日したのは、彼が四十七才のときであり、離日したこの年にはもはや五十三才に達していた。そもそもローシーはイタリア派バレエメソードの巨匠チェケッティ（Enrico Cecchetti 1850-1928）の高弟のひとりだったとされており、従ってこの年令推定は、のちにニューヨークメトロポリタン・オペラのバレエ・マスターにもなった彼の同門アルバチエリ^{*4}（Luigi Albertieri）の生年が1860年前後とされている^{*5}ことから無理なく納得出来る年次であろう。

次に来日以前のその経歴であるが、日本では直前までロンドン、ウェスト・エンドにある伝統的な劇場ヒズ・マジェスティ座^{*6}ならびにアルハンブラ劇場^{*7}のバレエ・マスターをつとめていたというのが定説となっている。ところで今回私が1897年から1913年に至る前者の全プログラム^{*8}に目を通したところローシーの名はどこにも発見出来なかった。この当時ヒズ・マジェスティ座は専らシェクスピア作品を中心にプログラムを組む硬派の劇場として、有名な沙翁俳優トリー（Sir Herbert Beerbohm Tree 1853-1917）の経営・支配するところで、かつてイギリス最初のオペラ劇場として知られた1867年^{*9}までとは、すっかりその性格・方針を一変していた。一方、アルハンブラ劇場での動向については、イギリスの

ジャーナリスト兼文筆家ペルージニ（Mark Perugini ?~1948）の手による同座の劇場史^{*10}があり、その文中1901年に上演された『The Handy Man（便利屋）』という作品のスタッフに初めてローシーの名が現れる。以来その来日まで、同じミュージックホール系の劇場エンパイア・シアター^{*11}ともども、バレエ、オペレッタ、パントマイムなどの軽演劇系列の作品にダンサー及び振付家として関わっていたというのが事実らしい。

それならば何故彼のキャリアにヒズ・マジェスティ座の名が出て来たかである。それは当時歌劇部の指導者を求めて帝劇の西野専務が日本からロンドンへ渡ったとき、ローシーを推薦したのがヒズ・マジェスティ座主宰であったトリーであること（その間の事情については同じく『日本歌劇の犠牲者』に詳しい）、それともうひとつは同座の名がスカラ座一派^{*12}のイタリア人芸術家たちにとって、もっとも名誉ある職場として神聖視されていたからに他ならない。^{*13}その歴史的事実が、心理的なものとしてローシーの心の中にあって、在日中その口吻から不正確にもれたことも充分考えられる。

この裏付けとして例えば以下の記事に注目したい。その第一。「ロンドンのエンパイア及びアルハンブラ 兩座にあり、かたわら英人にダンスを教授しいたるイタリア人ローシー氏を二ケ年雇入の契約をもって……」（『都新聞』明治45年8月6日付）その第二。「この人がアルハンブラやエンパイアのバレエ・マスターであったからと言って、劇のことが解ってたまるものかと罵る人もあるが……」（『<エレクトラ>上演覚書』大正2年 松居松翁）。これらローシー来日直後の記述中にはヒズ・マジェスティ座の文字はどこにも現れない。反対にアルハンブラ及びエンパイアの兩座がはっきり彼の前歴として説明されているにすぎない。ところがそれから数年たった大正七年に、雑誌『音楽界』が「ローシーオペラ没落史」^{*14}という、記事を掲載し、その冒頭で、「……彼の熱烈な気性、頑固な性癖は経る処の人と合わずに、いつも終りを完ふしなかつた。彼がラ・スカラ座を追われ、ヒズ・マジェスティ座を追われたのも云々」と初めて同座の名を彼のキャリアとして引用している。三回にわたるこの連載は、前述の『日本歌劇の犠牲者』が書かれたすぐあとの時期に始まっており、従って同文中に松翁が明らかにしたトリーがらみのロンドンでのローシー推挙の件りを、うっかり読み違えてヒズ・マジェスティ座にいたと書いたこともあり得る。いずれにしてもこれがさそい水のように、以後ローシーの経歴説明にはいつしかヒズ・マジェスティ座の名称が付随するようになり、戦後出版されたいくつかの

関連書や伝記にも^{*14}疑問視されることなく採用されて来た。

- * 1) Rossiはイタリア語で正確にはローシーと発音されるべきである。
- * 2) 『日本歌劇の犠牲者』大正15年(1926)中央美術社発行単行本「劇壇今昔」所収。文末尾に大正7年3月9日という日付サインがある。
- * 3) 日本での芸術活動は大正元年(1912)8月5日の来日に始まり、大正7年3月19日の離日に終る。
- * 4) アルバチェリがチケッティ門下でローシーと共に学んだことは、故高田せい子が無産党の闘士片山潜の娘やす子(彼女はニューヨークでアルバチェリに学んだ)から聞いて知っており、そのため大正11年アメリカへ渡ったとき、スタジオにアルバチェリを訪ねたが、一週間違いで当地を訪れたローシーと違うことが出来なかった。(筆者の高田氏からの直接取材による)
- * 5) 1860年の数字は「The Dance Encyclopedia」by A. Chujoy & P・W Manchester Simon & Schuster 社版所載。
- * 6) His Majesty's Theatre.
この劇場の歴史は古く、1705年4月、アン女王の治世下に創設され、当時の名はクイーン・シアター(Queen's Theatre 1705~1714)であった。その後キングス・シアター(King's Theatre 1714 - 1837)、ハー・マジスティ座(Her Majesty's Theatre 1937-1901)、ヒズ・マジスティ座(His Majesty's Theatre 1901 - 1952)時代を経て、現在もエリザベス二世女王の治下、再びハー・マジスティ座の名のもとに健在。
- * 7) The Alhambra. 1854年創設当時は円型の科学工芸展示館だった。1860年に舞台を加えミュージックホールとなり、更に1870年正式に劇場として登録されるようになってから、1936年9月に閉館されるまで、バレエ作品やオペラ・ブッフアの上演で有名だった。現在はオデオン・シネマという映画館になっている。
- * 8) トリーの采配下、硬派の劇場として第四次のスタートを切った1897年4月、その幕開け作品として上演された「Season」 「The Seats of the Mighty」に始まり、1913年3月の「The Happy Island」に至る計48作品のプログラム(British Museum Library, Enthoven Collection)。その中で「Tempest」(1904年9月)、「Anthony and Cleopatra」(1906年12月)、「Attila」(1907年9月)及び「As you like it」(同年10月)

の4作品に劇中バレエが挿入されていて夫々振付担当者が明記されているがRossiの名は見あたらない。

- * 9) この年同劇場はヴクトリア女王治世下大火にあって焼失、オペラ劇場としての盛名と共にその第二期を終える。第三次は69年に再建、77年に劇場として復活したがふるわなかった。
- * 10) 「The Story of "The Alhambra 1854-1912"」 雑誌『The Dancing Times』1915年2月号~6月号所載。同文中Rossiの名は「The Handy Man」(1907年1月)、「Les Cloches de Corneville」(1907年10月)、「The Two Flags」(1908年5月)などの作品と共に見える。特に「コルネヴィーユの鐘(Les Cloches de Corneville)」は7ヶ月の日延べ、2年後の再演という人気を博した作品で、守銭奴コルネヴィーユに扮したRossiは筆者ペルーヰニも絶賛しており、これが後年彼の来日後、帝劇での上演につながっていることは明らか。尚後にローシー夫人となった女優ジュリアの名は1893年ごろから見える。
- * 11) Empire Theatre. 1887年に建てられ、1914年第一次世界大戦勃発と共に閉鎖された。アルハンブラ劇場と並んでロンドンの軽演劇劇場として知られ、E・チケッティもここでイギリスでのデビューを果たしている。
- * 12) 「〈エレクトラ〉上演覚書」。大正15年中央美術社発行『続・劇壇今昔』所収。
- * 13) 「ローシーオペラ没落史」。河野良助。雑誌『音楽界』大正7年5月~7月号(199~201号)三回にわたって連載。Rossiに対する感情的攻撃態度が見える。
- * 14) 「赤坂ローヤル館とローシーオペラ」松本克平著『新劇貧乏物語』筑摩書房 1966年所収 P.584。内山惣一郎著『浅草オペラの生活』雄山閣 1967年 P.21。日下四郎著『モダン・ダンス出航』木耳社、1976年 P.40。その他の百科辞典類など。

＜関係参考資料＞

- 「King's Theatre 1704 - 1867」 by Daniel Nalbach (The Society for Theatre Research 1972)
- 「London Theatres as Music Halls 1850-1950」 by Diana Howard (The Library Association 1970)
- 「History of the London stage and its famous players 1576-1903」 by H・Barton Baker(George Routledge and sons, Limited 1904)
- 「ロンドンの劇場」大場建治著(研究社版 1975年)